

歌集『紅』

市川茂子

空家となりても灯る向い家に売物件のポスター貼らる

百日紅主なき家の窓覆う去年も今年も枝を広げて

鉢植えの稲穂こうべを垂れながらビルのかたえに夕陽浴びおり

鉢一つふえて咲きつぐ玉すだれ暮れ早き庭に白の浮き立つ

吾がそばに在わす思いに拗りゆくは歌集『紅』^{べに*}にてそを開きたり

*布宮みつこの歌集

再びは逢うもならずに口惜しく歌の中にて言葉交わさん

歌稿持ち逢いにゆきたる喫茶店よみがえりくる遙かなる日よ

季^{とき}くれば取り出だしては纏いゆく幾年も着古ししカーデイガン

川底の砂一粒の存在が大空を舞う夢の中にて

紅葉の陽に照り映える道の辺に朽葉、縮れ葉木下にまるぶ